

第二期 第百十六号 (初版) (無料)

# 音信不通

本のピオトップ

学びあう人々のために

2026.03.10 定有堂書店 発行

## リゾーム

八〇年前の雑誌を読んできた。

日々是雑言(ぞうごん) 14

凝思の百鬼夜行

ジョーとカーステンの酒瓶

仙台で暮らすということ

Headstart For Happiness

本を作る側から(36)

論語について(10)

立春の卵 (\*\*)

内坪井町日記 (21)

ロンドン、世界の中心？

ごぼっぴ

編集後記…

奈良 敏行

岩田 直樹

萩原 俊郎

板野 円香

おぎはらきえ

堀内 菜摘

高木 善祥

村瀬 謙介

小原 修治

ムラカミヒロミ

齊藤 仁昭

三浦 永理

あぎの素生

ドラメリア

## リゾーム

奈良 敏行

(定有堂 主人)

「ひとり本屋」という言葉を耳にするようになったのは、いつ頃からだろう。十年くらい前からだろうか？ 普通の本屋が減り始めた頃とグラデーショナルに重なるのだろうか。

「ひとり」だから不自由な気もするが、逆に余計なことをしないで、本が好きという一事に専念する、という輝きもある。お店も金・土・日くらいに、それも十二時あたりから開ける。どうしてそういう形態が可能なのか、外部からはうかがい知れないが、「いいな」と思う。ただし、わたしにはとてもできない。じっとしているのが苦手だからだ。

でも、そんな「ひとり本屋」が増えていくのはすてきなことだ。しかし、「ひとり本屋」で、なにも変わらず十年つづく、というのは新鮮味を欠くかもしれない。勢いである仕事だからだ。そしてその勢いには軽みも加わる。実際はどうなのだろう。

定有堂は一九八〇年に始めた本屋だが、最初は三十坪

だった。末永く続けようと思ったので、立地も工夫し、建物も自前にすることにした。とても「ひとり本屋」の風情はそこにはない。でも「ひとりの個性」で作られた、という風情は濃厚だったようだ。

店舗は三十坪だが、奥の左横に二十坪の事務所をとるスペースがあった。十坪を本屋の作業場にし、残りの十坪を交流スペースにした。徳永進医師が一九八二年に『死の中の笑み』で講談社ノンフィクション賞を受賞したときには、同時受賞の松下竜一さんとの対話トークを行った。作品は『ルイズー父に貰いし名は』だった。平日は、湯沸かし器を置いて、紙コップで、自由にインスタントコーヒーを飲めるようにしていた。無料だった。

一軒おいて隣のビルが、松江に本社のある新聞社で、若い記者の人たちが、よく時間つぶしにたむろしていた。そういうするうち、他社の若い記者の人たちも本屋でたむろするようになり、町の記者クラブのようになった。中には自分の机を持ち込む人までいた。親しくなったひとりに、午後から出社する人がいた。アパートと駅向こうの新聞社の中間に定有堂が位置し、毎日立ち寄った。手にクルミの種を握りしめていた。集中を高め、社に到着するなり一気に全開始動するのだという。整理部の人だ。後で知ったが、それは整理記者の伝統のようだった。

本屋を開業する三十歳まで、わたしは極力、無用の人間として生きようとしていたので、役に立つ資格を身につけることを拒否し続けていた。しかし、日曜は本の配送がなく、自分で運送会社まで取りにいかねばならないと知った。それで、あわてて運転免許を取ることにしたが、開業には少しだけ間に合わなかった。

ある日、工作舎の本が好きな若者がやって来た。東京で工作舎の「遊塾」に通っていたそうだ。鳥取では少数派と思われた。偶然、工作舎の本が好きな若者が、交流スペースでコーヒーを飲んでた。それで、そこに同じ少数派がいるよ、と教えた。少数派が集まり始め、このスペースでは多数派となった。

購入した車には、横に書店名のロゴを入れた。とくに配達（外売）を考へてはいなかったのだが、常連の人たちの注文した本が入荷すると、来店を待つのが待ち遠しく、職場に届けることにした。遊びがてらの気分だった。新聞社・放送局・県庁そして記者クラブ・高校などが始まりだった。

町を走る定有堂の車を見て、ある時、常連の一人が「なにかヘンだ」と言った。外売りの風情が、書店みたいだ、というのだ。「定有堂は書店だよ」と返すと、「いや本屋だよ。口入りの車だと会社みたいでヘンだ」と答えた。

それからロゴを取り払い「ひとり本屋」を擬態するように

なった。届けると留守のことも多く、伝票がツケ買いとなつてしまうようになった。店頭でも「伝票でね」といわれるようになった。外に出て販売するところくな事はない、という予感がし始めたのはその頃だ。

店頭で値切る人はいないが、職域に行くと、時々値切られる。高校などは、支払いは半年に一回という先生もいた。年配の先生の中には「退職金払い」という人もいた。本当だろうか。どうも本当のようだった。

県庁・高校をはじめ、転勤移動というのがあった。半径一キロの職場だから届けていたのだが、移動があれば付いていくしかなかった。小商いには断るという思い切りがないのだ。優柔不断。しかし開業の時、運・鈍根のトライアングルの中の、「鈍」を指針と決めていたので、つまり「自分で決めない」という心のルールだった。ここは判断しないことにした。

この決断はよかったのだろうか？ ゆとりはなくなつたが、町の中に友達がいっぱいできた。本を媒介にしたつながりは、とても濃厚なつながりだ。鳥取で唯一の取扱い(直販)だった四輪駆動の雑誌があったのだが、店頭に取りに来たついでに、体験させてあげると誘われ、千代川原の広大な土手を登り降りしたこともあった。この雑誌の届け先には小学校の校長先生もいて、雑誌を持っていくと、必ず校長室で

お茶を飲んでいけといわれた。

遊んでばかりの昼間のようだが、夕方六時から十時過ぎまでは「ひとり本屋」で店番をした。昼間に本を届けたばかりの人たちが、仕事を終え、交流スペースにたむろするの、何のために届けたのだろうかといぶかしく思った。

定有堂とはそんな本屋だった。四十年過ぎて、自分でも特殊な本屋だったんだなと思ひ始めた。黄昏時になると人はふり返って考える。本屋だから、「考える」とは「概念化」するという方向に進む。棚にドウルーズのコーナーを作り始めたのは、そんなことの言語的共有を考え始めたからだ。「リズム」という認識の手がかりがある。根茎の広がりだ。親しくなった人の職域は垂直な樹木のようなものだ。しかし、職域移動に付き従うことで水平方向にわたしの行動範囲が広がる。

「リズム」というのは、一九七七年に刊行された『エピス テーメ臨時増刊号』で、読者を震撼させた概念だ。その時はよくわからなかったが、定有堂の変化生成の記憶をたどると、なるほどそういうことだったのかと思ひ当たるものがあった。

## 八〇年前の雑誌を読んでみた。

―「ブックインとつとり」と「読む会」

岩田 直樹

(再解釈本舗・読む会講師)

雑誌を定期購読したのは『科学と学習』だけである。休刊になったニュースを少し前に読んだ気がする。ウィキペディアで調べてみるといろいろと面白い事実がわかった。

『科学と学習』は存在せず『科学』と『学習』の別々の雑誌だったこと。ともに一九四六年に創刊され、『科学』は二〇一〇年三月号、『学習』は二〇〇九年度冬号が最後だったこと(私にとって一六年目が「少し前」であること)。ピークの一九七九年には月販六七〇万部に上ったこと。

放課後に体育館で売っていた鮮明な記憶がある。封筒(集金袋)の表に四月から翌年三月までの『科学』と『学習』の枠が印刷してあり、お金を払うと先生がハンコを押してくれる。いつも近所の幼馴染と一緒に買いに行った。その友人は故郷を出て、家屋敷は更地になってしまった。

学校内で営利行為が許されていたのか。消費者基本法制定を受けて、一九七一年に日本消費者連盟が批判する。一

九七二年、公正取引委員会が勧告を出して学校内では販売員が担当することになった。私の小学校卒業は一九七四年だが、六年間ずっと先生にハンコを押してもらった記憶は間違いないのか。

そうそう、雑誌の話を書こうとしていたのだった。一ヶ月ほど前、新聞をポーツと眺めていると広告欄に目が留まった。『世界 創刊号(昭和二十一年一月号)』が翻刻されるというのだ。『世界』といえば、戦前の『改造』に匹敵するオピニオン雑誌の一つである(あった)。『世界』と『科学』『学習』が同じ年に創刊されたのは偶然ではない。不安や混乱の最中で(教育によって)新しい文化国家を建設していこうという先人の熱き思いがそこにはあった。

岩波書店の雑誌といえば、理系の学生だった頃に時々買ったのが『科学』である。量子力学、プレートテクトニクスなどの特集号は今でも本棚に並んでいる。文転してからは『思想』、例えば現象学、フッサール、メルロ＝ポンティ、ドゥルーズらを扱った特集号にはお世話になった。

『世界』は、といえは、今までに一冊しか読んだことがない。一九八〇年五月に韓国全羅南道で発生した光州事件(軍事政権に対する民主化要求運動とそれに対する苛烈な大弾圧)を特集した一九八〇年八月号である。

『世界 創刊号』(二〇二六年一月)の表紙を見て、それだ

けで大いに驚く。執筆陣が歴史的人物ばかりなのである。論説は、安倍能成「剛毅と真実と智慧を」、美濃部達吉「民主主義と我が議会制度」、大内兵衛「直面するインフレーション」、和辻哲郎「封建思想と神道の教義」、東畑精一「日本農政の岐路」、横田喜三郎「国際民主主義の原理」。創作は、志賀直哉「灰色の月」、里美淳「短い糸」。詳しい目次には、桑原武夫、中村光夫、湯川秀樹、武者小路実篤、長与善郎、尾崎罇堂（行雄）らが並ぶ。

岩波茂男の「発刊の辞」と「世界」の創刊に際して「からは当時の雰囲気がよく伝わってくる。執筆陣の胸に秘めた思いであつただろう。

敗戦前、岩波は自由主義者、非戦論者、時には国賊とまで呼ばれた。「それにも拘わらず大勢に抗し得ざりきは、結局私に勇氣がなかつたからである。私と同感の士は恐らく全国に何百万か存していたに違いない。若しその中の数十人が敢然蹶起し、恰も若き学徒が特攻隊員となつて敵機敵艦に体当たりを敢行した如く、死を決して主戦論者に反抗していたならば、或は名分なき戦争も未然に喰ひ止め得たかも知れず、たとえそれが不可能であつても、少くとも祖国をここに到らしめず時局を收拾しえたかと思われる。私に義を見て之に赴く気概の無かつたことは、顧みて慙愧に堪えない。」(二〇一頁)

安部は道義的國家の建設を説き、美濃部は貴族院に代わる第二院の在り方を探る。大内は目の前のインフレーションの解決と社会的組織的解決は相即することを論じ、東畑は工業などの就労機會の創出こそが零細農を救済して日本農業の近代化につながると主張する。横田は民主主義の原理を標榜する国際連合に期待する。

きわめて異色なのが和辻論文である。神道國教化は信教の自由を侵しただけでなく、帝國主義的侵略が天皇統治の伝統から必然的に発生した印象を世界に与えてしまった。

「天皇の神聖性は日本の國民共同體の地盤から生い育つたものであつて、他の民族に強要すべきものではない。……それ(平田神道から導き出される、天皇が万国を支配すべきだとする考え方——岩田注)を現代の世界に適用し、大東亜經綸の理論となすに至つては、同じ日本人として實に赤面に堪えない。かくの如き偏狹の徒の故に天皇統治の傳統が傷われないことを衷心より祈るものである。」(六二頁)

他の論者と立ち位置が異なるのに違和感を覚える。帯には「創刊八〇年、戦後日本の「初心」を読む。」とある。

そうか、和辻が論じる内容は、一定數の人々にとつては敗戦後の「初心」だったのだろう。それにしても和辻論文の中にGHQの檢閲による削除箇所がないのは不思議だ。

日々は雑言(ぞうごん) 14

萩原 俊郎

(倉吉市在住)

日ごろ気になることを、つれづれなるままに。

皆が早苗ちゃんに騙されるわけ

「外国国旗を汚したり破つたりしたら、拘禁刑を受ける。でも、日本国旗はどう扱っても罪には問われない。他国の旗は尊重されるのに、自国の旗は尊重されない。おかしいじゃないですか、皆さん」

解散総選挙の公示日、秋葉原の街頭に立った高市早苗首相が語ったのは、有権者が一番知りたい物価高対策でも消費税減税でもなかった。

たぶん、これだけを聞くと大半の日本人は「そうだ、そうだ」と思ってしまうだろう。それが「ポピュリスト」「アジテーター」としての高市の真骨頂である。

2年以下の拘禁刑または20万円以下の罰金が課せられ

る「外国国章損壊罪」は、日露戦争後の明治40(1907)年から残る古い法律だが、実際は、高市の言う「他国の旗を尊重する」ため作られたものでは、全くない。

旗を汚すことで相手国との外交問題につながることを防ぐ、むしろ「日本の外交や国益を守る」のが目的で、高市の言い分とは真逆になる。

一方で日の丸は、高市の言う「どう扱っても罪に問われない」どころか、公共あるいは持ち主がいる場合、神社仏閣への落書きと同様、外国国章損壊罪よりも刑罰が重い器物破損罪や放火罪などでしょっぴかれる。

外国の旗には損壊罪があり(尊重され)、日の丸にはない(尊重されていない)。巧みな論点のすり替え、口先のトリック。皆が早苗ちゃんに騙されるわけだ。

だが国章損壊罪などなくても現実には何の不都合も起きていないことは、多くの政治家や官僚、そして実は高市本人も分かっているはずだ。社会的必要性(立法事実)がないために、戦前の日本でさえ一度も国会に提案されなかった。それを今なぜ急いでいるのか。

外国人がシカを蹴っている

かつて総裁選のさなか、彼女は「奈良公園で外国人がシカ

を蹴っている」と発言し、地元の観光協会は「そんな事実を確認していない」とすぐに打ち消した。ありもしない、起きてもないことを勝手に「問題化」し、そのための「対策や法律が急がれる」と声高に呼びかける。今回の国章損壊罪もまさにそうだ。

実は戦前の治安維持法、そして香港の自由を奪った中国の国家安全維持法も構造は全く同じで、起きてもないこと(国家反逆罪、騒乱罪)をつくり上げて取り締まりの対象にする。高市はその流れをつくりたいのだろう。

もうすぐ彼女は「外国のスパイがうようよいる」と言い出すはずだ。恐ろしい国になった。

エポケー

やっぱり「高市ネタ」に戻ってしまったか、と暗い日々である。夕飯の支度で買い物袋を下ろすと、突然、頭の中で「エポケー」という声があった。

ずいぶん懐かしい。何だったっけ。大学の指導教授だったお富さん(西川富雄先生)の声だ。哲学史の講義で、視線を宙に漂わせながら語っていたような気がする。

半世紀近くも経って、彼に習った言葉がふとした拍子に浮かぶことがある。いささか神秘主義的かも知れないが、今

の私への何らかの霊示的なメッセージ(Revelation)かも知れない、などと勝手に解釈している。

思い出した。古代ギリシアの懐疑論者の「判断停止だ。」「いい悪い」「正しい・間違い」と判断を急がず(新聞記者だった私はその傾向が強い)いったん保留して、先入観なくありのままの事象を見つめる…学生時代のおぼろげな記憶を、ようやくたぐり寄せた(その後のフッサールや現象学への展開については岩田先生に)

「エポケー」。お富さんの口調を真似て唱えてみた。

「日本を動かす」「強くする」とやたら威勢よく叫んでいたのはあの女性首相だった。あとの野党幹部ら(永田町の典型的な中高年男性たちは)は「守る」「許さない」ばかり。数合わせの新党結成など、全く魅力に欠けた。

どちらに軍配が上がるかは明白だった。皮肉なことに、これで世論の多くが支持する夫婦別姓や同性婚は確実に実現しないにしても、改憲やスパイ防止法は「国論を二分する」議論もないまま、数で押し切られるにしても。

でも、嘆いていても仕方がない。それが私たちの選んだ結果だから。「今ここに」ある「現実から一步を踏み出そう。沈んでいた心が少し吹っ切れた。

ありがとう、お富さん。

# 凝思の百鬼夜行

板野 円香

(薬剤師・岡山県在住)

これは、極めて私的なデザイナー考である――

「極私的で、汎用性など皆無なエディトリアルに関する語らいが、これから二時間半にわたり行われる」、京極先生は、そう口火を切った。小説家・京極夏彦とブックデザイナー・祖父江慎による対談が、神保町のとあるビルの一室にて執り行われた。そして私もそこに居た。

発端は一カ月前に遡る。仕事の休憩中、たまたまインスタに一枚の広告が流れてきた。黒の背景に柿色の文字で『印刷博館主催 極私的エディトリアルデザイナー考』。

「なんじゃこれ？」

目を引いたのは、そこに京極先生の写真が掲載されていたからだ。何でも造本や装丁に関わる対談が、東京・神保町で開催されるらしい。昨年春、印刷博物館の第四代館長に就任したと聞いていたが、こんな企画もしているのか。

京極夏彦――『読める鈍器』でおなじみの作家。『姑獲鳥の夏』『魍魎の匣』などの百鬼夜行シリーズは、取り回し

易いように私は文庫で揃えている。が、文庫といえど厚く重いので、携帯して読もうものなら確実に手首を殺(や)る。三年前に発売されたシリーズ最新作『鵺の碑』ハードカバー版なんて一・二キロもある……凶器である。

作品自体は大長編を感じさせないほど面白いのだが、テキストにも審美的なこだわりがあるのも知っていた。どこかの記事で読んだことがあるが、『作品の温度に合わせるために「云う」という表記で統一している。一般的には「いう」という表記だが其れでは軽すぎる。かといって「言う」では邪魔になるし、刷った時に黒くなり重たい。だから「云う」と表記する』らしい。(ウエブテキストは分からないが)紙の書籍でここまで拘る作家は他にあらうか。

内部に蠢く意思が知りたい。書籍という、綴じられ、閉じた媒体がどのように設計されているのかを。

《見たい。匣の中が見たい。私の中の魍魎が、動いている。》

そうして、抽選に当たるともわからない「現地参加」のチケットをポチったのであった。

抽選結果はこの状況のとおりであるが、ほどなくして盛大な拍手のなか京極先生が姿を現した。

漆黒の着流しに、薄手の黒の羽織。その上に朱色の帯。銀色の羽織紐と松葉色の紐止め。髪色と等しくするように鼠色の首巻――そしてトレードマークの革のグローブ。京極夏

彦は寸分違わず『京極夏彦』であった。逆に驚かない。凄  
い。そうして文頭の挨拶に戻る。

会では大まかに「造本プラン／フォーマット／組み」につい  
て『どすこい(仮)』『集英社』を題材に解説された。

『どすこい(仮)』は個性的なDEBUが登場するコメディ  
チックな短編集ある。作家からテキストが届いたら、まず造  
本テーマが決められる。ブックデザイナーの祖父江さんは  
「太った人が沢山出でくるから、本も太らせよう！」そのた  
めに軽いけど厚みのある紙を使おう」と決めたそうだ。テ  
マと本の関連性。物質としての本をどう設計するか——作  
品の手触りや、手に取って抱く印象を大切にしているらし  
い。そんなことまで考えているのか、ふむふむ。

次に興味深かったのが表紙デザインの話。『どすこい(仮)』  
の表紙には、見切れたDEBUの上に「滴り落ちる脂汗」  
が一面に立体プリントされている。しかも角度を変えれば、  
汗がギトギトと反射するという特典付きだ。何とも暑苦し  
い。文章もオリジナルの複合フォントを使っているそうで、  
「この時は文字は〇〇明朝、『は△△明朝。？』は◎◎フォ  
ントにしましたね。その方がまとまりいいから」って、凄すぎ  
ないか。次々に放たれる祖父江さんの、執念にも似た製本  
造りに私はただただ圧倒される。

京極先生のこだわりも尋常ではない。文末に句点が来た

時、「文字を揃えて。」をほみ出す(ぶら下がり)か」。  
“も含めて文末ラインを揃える(追い込み)か”かを選ぶのだ  
が、先生は長く文字を読む際の負担を考え、テキストが真  
横に揃う「ぶら下がり」を選択されることが多いそうだ。ち  
なみに改ページにもこだわっているようで——確かに、どん  
な鈍器本でも一文がページを跨ぐことは無かったなあ。そ  
れも設計してたのか、うん、うん……こわあ。

また、長いルビが文末に来ると審美性を損なうので、そこ  
は「媒体(新書か文庫か等)のレイアウトに合わせて、テキ  
ストの方を」加えたり削ったりする”とのこと。

「文字一つ加えられない奴は小説家ではない」  
かつこ良すぎでしょ。

もはや脅威と化した二人の対談を夢中で聞いていたが、  
あつというま間に終焉。

思念が何重にも注ぎ込まれた紙媒体の書籍。改めて、手  
にとる喜びを知る一日であった。私はこれからも百鬼夜行  
の列についていくのであろう。作家とデザイナーの凝思が密  
やかに歩む、その気配を追いながら。その最後尾で頁をめく  
るのである。

(了)

## ジョーとカーステンの酒瓶

おぎはら きえ (蔭山)

友人と串カツ屋に行った。ハイボールを飲んだ。旅先で寿司屋に行った。日本酒(冷)を飲んだ。

別の友人とフレンチに行った。ワインを飲んだ。

どの店でも美味しく食べて、美味しく飲んだ。

金曜日の晩、夕食と共に缶ビールを一本飲んだ。

平日の労働をねぎらい、心と身体を弛緩させた。

楽しくお酒を飲む機会が続いていたところ、映画『酒とバラの日々』を見た。主演はジャック・レモン。他の主演作『お熱いのがお好き』や『アパートの鍵貸します』などを見て、彼のユーモラスで軽やかな演技が魅力的で、出演作を追って見たのだった。

広告代理店で営業をしているジョー(ジャック・レモン)が得意先の会社の社長秘書カーステン(リー・レミック)とひどい出会い方をしながらも、惹かれ合い、結婚する。子どもも

一人でき、立派はアパートに住み、一見幸せそうに見えるが、ジョーは仕事上の付き合いとそのストレスから過剰に飲酒する。また、カーステンもジョーに付き合い合つて酒を飲み出すが、いつしか自分自身の寂しさを紛らわすために彼が仕事で不在のときも家で一人飲酒するようになる。夫妻でアルコール依存症になつてしまったのだ。

ジョーの仕事上のストレスの一つに得意先との接待がある。男性中心の会社の接待ではコンパニオンを集めなければならぬ。相手先の事業規模に比例して接待の規模も大きくなる。「おれはポン引きじゃない」と嘆くジョー。しかし立て続けに接待の席を設けるよう上司が促すので、やんわり断るとすげなく配置換え、次の担当先でもうまく立ち回れず、左遷。遠方の企業をもたされたジョーは出張が続く。寂しさがますます募るカーステンも飲酒が増え、ついには家で火事を起こす。

これをきっかけに臆首されたジョーは、それでも酒は断たず職を転々とする。しかし求職活動をしていたある日、窓ガラスに映つた自分のみすぼらしい姿を見て「酒を飲むからだめなんだ!」と気がつき、断酒と再起を決意する。えらいぞ、ジョー。カーステンにも「一緒に酒をやめてやり直すんだ」と宣言し、一家は都市部から郊外にある妻の実家に居を移す。彼は、妻の父が経営する園芸農場で肉体労働をし

て汗を流し、ついに義父からの信頼も得る。すごいぞ、ジョー。ところが順調に人生を立て直しているさきやかな祝宴とばかりに彼はカーステンも誘って寝室で酒を飲んでしまふ。

私は知っている。吾妻ひでおの『失踪日記』(イースト・プレス)を読んでいるから。漫画家吾妻ひでお自身のアルコール依存症体験(とホームレス体験を描いた『失踪日記』で、作者が入院した精神科の医師が依存症について説明するシーンがある。「アルコール依存症とは不治の病気です。一生治りません」ぬか漬けのきゅうりが生のきゅうりにもどれないのと同じです)依存症になってしまふと「適量」はない。断酒生活のみが回復の道なのだ。

案の定、二人は持ち込んだ酒瓶を空にし、べろべろに酔っぱらう。当然カーステンの父にも露見し、再び生活は破綻する。

ジャック・レモンのユーモラスで軽やかな演技を期待して見始めたが、酒を探して温室の鉢植えをなぎ倒して暴れたり、閉店した酒屋に酒を出してもらおうと必死になった末に強奪しようとしたり、病室に拘束されてアルコールの離脱症状に苦しんだり、彼の迫真の演技に目を見張った。

お酒は楽しく飲みたいと思う。以前勤めていた会社の上司で、毎夜酔い潰れて眠る、そうしないと寝れないという人

がいた。本当なのか誇張なのか。そんな飲み方、嫌だなど思った。時は流れ、私自身が上司の立場になるとストレスからずつと胸に圧迫感を感じるようになった。頭の中がずつともやもやして、何も手に付かない。酒をとことん飲んで卒倒するように眠ってしまいました。それまでも仕事で嫌な思いはたくさんしてきたが、そんなことを考えたことはなかった。こんな私はおかしい。このままここにいたら吾妻ひでおのように一切酒を飲んではいけない身体になってしまふ。そう気づくと、速やかに退職願を書いて上司に差し出した。

酒を飲むとはかくあるべしと教えてくれたのは、学生時代に読んだ村上春樹の小説だと思う。『ダンス・ダンス・ダンス』(講談社)のように「詩的な趣」があるサンドイッチを作ってビールを飲み、『眠り』(文藝春秋)『<ピープル』(収録)のようにチョコレートをつまみにブランデーを飲みながらトルストイの『アンナ・カレーニナ』を耽読するのだ(『眠り』はこれこれで病的な話だが)。

未だに詩的な趣があるサンドイッチの習得には至らず、『アンナ・カレーニナ』は積ん読の山に埋蔵されている。

## 仙台で暮らすと(づい)と

堀内 菜摘 (仙台市在住)

鳥取から仙台に転勤することが決まった2024年の春家探しのために、飛行機と新幹線を乗り継いで仙台を訪ねた。出迎えてくれたのは、不動産会社の50代男性。びしっと決めたスーツ姿の男性に連れられて、いくつかのアパートやマンションを見て回った。

男性は物件を紹介する際に、必ず前置きする。「東日本大震災を乗り越えることができた、丈夫な家です」、「震災後に建てられた、耐震性に問題のない家です」と。慣れた口調で紹介してくれるものだから、驚いた。これが、地震の多い町で暮らすということなんだ。

「丈夫な家」に暮らし始めた5月、同僚に誘われて「仙台・青葉まつり」に行った。

「ソーレ、ソレソーレ!」。新緑の下、色鮮やかな法被に身を包んだ老若男女の踊り手が、扇子を手に軽やかに舞っていた。息の合った踊りに、浴道にいる私たち観客の熱気も高まっていった。

何千人もの人が、元氣よく踊っている。あまりにもすがすがしい笑顔に圧倒され、気づいたら目頭が熱くなり、涙がこぼれていた。その笑顔の理由を想像せずにはいられなかった。

あの日、地震や津波によって多くの人が命を落とした。今も2519人が行方不明のままだ。残された人は、家族や友人の死と向き合い、笑うことのできない涙色の時を乗り越え、懸命に生きてきた。

被災地である宮城には、防災や救援、医療などに関心がある人が全国から集まってくる。世界中のボランティアを受け入れた経験から、地元の人と移住者が互いに支え合う文化が根付いているとも思う。そんな私も、防災に関わる仕事をしたくて仙台を志望した。

きっかけは学生時代。一人旅の途中で石巻にある伝承施

設を訪ねた。そこで、行方が分からないおいつ子の帰りを待つ、高齢の女性に出会った。

津波で浸水した場所から高台に避難している時、一緒にいたおいつ子が、逆流するマンホールに吸い込まれてしまったという。女性は「小さな手を離してしまったの。悔やんでも悔やみきれなくて…」と声を詰まらせた。私は何も言えず、女性と一緒に涙を流すことしかできなかった。

女性の「マンホールに吸い込まれる危険性を知っていたら」と話す悲しいまなざしを忘れることができず、誰かの命を守ることができる人間になりたいと思い、仙台にやってきた。

実際に2年間暮らし、さまざまな人から影響を受けた。所属する教育系サークルの代表は、口癖のように「拾った命なんだから」と言い、自分のためではなく、誰かのために力を尽くそうとする。

南三陸の男性は、町の好きなどころを「海」と答える。「海にやられたけど、この海のおかげで復興できたから」とほほえむのだ。そのたくましさに、どんな深い悲しみや傷を背

負っているのだろうか、と考える。

中学時代に不登校だった女子高校生は、県外にいる親元を離れ、沿岸部の高校に通った。震災の困難から立ち上がった町だったら、私も立ち上がっていくことができるかもしれない。町と自分を重ね合わせた。

この春、大学に進学する彼女は「私はラッキーだった。ここで一生ものの友人に出会えたから。また戻ってきます」と笑った。

仙台の人と一緒に暮らし、たくさんの元気をもらった。やらなければならないことを地道に続けていく大事さを教わった。

今年の3月も、多くの人が海に向かって手を合わせる。

「ここで、頑張っているよ」

涙ぐみながらでもいい。私も、笑顔で、前を向いて生きていく。

# Headstart For Happiness

高木 善祥

(SHEEPSHEEP BOOKS)

編集者と言えば、マンガやドラマでよく見るやたら広くて間接照明しかない豪華なマンションに住んでいるファッション雑誌編集者か、「夜討ち朝駆け」でボロボロになって働くコミック誌担当くらいしかイメージになかった。

アート系／人文系編集者はどんな流れで仕事をしているのかお聴きしようと、フィルムアートの編集者・今野さんをお迎えして一月にトークイベントを開催した。

編集者になるまでの経緯や、日本の著者や海外作品の発掘方法。実際に使った赤（修正指示）の入ったゲラや束見本を用いての具体的な編集のプロセス。さらに失敗談やトラブルなどの苦労話&裏話も。また、東京中心の出版業界で、鳥取でどう仕事をしているかについても、色々と語ってもらった。

参加者からの熱のこもった質問も途切れず、おかげさまでとても盛り上がった。今野さんには「ぜひ二回目も！」と打診しておいた。次のゲストはまだ思案中である。

\*

今野さんの「編集の仕事は小さな決断の積み重ね」という言葉を、本屋の仕事に置き換えてみる。仕入れる／仕入れない、見出しを作る／作らない、見出しのキーワードを何にするか、誰がこの本を購入する（と想定する）か、この本の隣に何を並べるか。そしてどの仕事に自分のリソースを割くべきか。常に走りながら考えている。

\*

先月ここで書いた高校生のブックデザイン作品を、店頭で展示することになった。

その本を選んだ理由と、どこに注目してデザインしたかが書かれたコメントカードと、生徒がデザインしたブックカバーが並ぶ。本の中に忠実なものから見返しにちよっとした仕掛けがあるもの、グラフィカルで書店の店頭に並んでもそんな色ないものなど、どれも個性的でお客さんにも好評だった。

余談。企画者である美術講師兼デザイナーの友人に展示作業をしてもらったのだが、百均のブックエンドとクリップを駆使してコメントカードとブックカバーを自立させ、あつという間に完成させていた。

アイデアと手際の良さに「これぞまさに“手仕事”だよな」

と、ちよつと感動した。

\*

—Mさんからの紹介で、二人で本屋を始めようとしている方から相談を受ける。

カフェを併設した形で考えているが、具体的なアクションはこれから。書店で働いた経験はないのでイチから教えてほしいとのこと。せつかくなので、ちよつとした話す場を設定してもらうことになった。

自分の店ですらまだまだ出来ていないことも多く、背中を押していいのかがどうか不安なところだが、その心意気に応えたいという気持ちで勝った。

立地はその店の方がよく、言ってしまうえば競合店である。しかし(残念ながら)当店の売上規模はそもそも小さいので、歩いて行ける距離に本屋ができたからといって、極端に売上が落ち込むことは(多分)ない。

そして、近くに自分の店とは違う品揃えの本屋があった方が楽しい。それは私個人にとってもそうだし、お客さんにとってもそうだ。

初期投資をできる限り抑えて、省力で本屋をできる限り続けられる方法はあるのか。

この問いと実践は自分のためでもある。

店を始めてもうすぐ二年。少しずつ街に溶け込んできたことを実感する。

#### 【参考文献】

『小さな店をつくりたい…好きな仕事で生きる道』井川直子 家の光協会

十坪ほどの小さな飲食店を営む人たちに取材したもの。何かを始めていく人に。

『ふつうの人が小説家として生活していくには』津村記久子 夏葉社

文章を書くこと。働くということ。

同著者の『やりたいことは二度寝だけ』(講談社文庫)もおススメです。

『ほんのちよつと当事者』青山ゆみこ ちくま文庫  
よいタイトル。

定有堂ビル2階 古書・新刊の本屋

SHEEPSHEEP BOOKS 店主 高木善祥

## 本を作る側から (36)

村瀬 謙介

(小取舎)

本が一番売りやすい時は発行日から三ヶ月間である。これを過ぎて長い期間、郷土本のコーナーのある書店さんに甘えて置いていただいているのだが、発刊して何年も経つ本でもというタイミングなのか書店や amazon でもちらほら売れている。どこでどう知ったのかは人それぞれ。読んでいただいた方から紹介されて購入に至った方や、興味あるキーワードから検索されてたどり着いた方、偶然書店で見つけてなんて方もいる。こちらとしては発刊から時が経った本の「テーマ」が絡められる時事がきた瞬間を見張っていないくちはならないし、機があればすぐさま発信しないといけない。とはいってもこれまで出した本のキーワードを毎日毎日サーチするのもなかなか時間がかかる。何かいい方法はないかと探っていたら「グーグルアラート」というものを見つけた。キーワードを登録しておいたら指定のタイミングでインターネット上のあらゆる場所から検索し、自動的にメールでお知らせしてくれる(ただ、話題になっっていなかったらどこからも拾ってくれない)。

二月上旬に『宇沢弘文「社会を治す」』が amazon でポツポツ売れた。調べると某政党の議員が宇沢弘文のことをブログで書いていたからだ。登録した小取舎にまつわるキーワードのうち、グーグルアラートでよく通知がくる言語は、「宇沢弘文」と「アーレント」、次いで「性同一性障害」が多い。河本直『ヒゲ面の元ママーお互いの違いを尊重し合える優しい世界の形』(小取舎)でのテーマの一つである「性同一性障害」というキーワードがヒットしたのは、最近ネットフリックスで配信が始まったドラマ『This is I』の影響だった。タレントのはるな愛の自伝と、性別適合手術を行った医師・和田耕治をベースにしたお話。グーグルアラートはXの投稿からもキーワードを拾ってくれる。非常に便利だ。エゴサーチも自動でやってくれ。これにより元々の本のテーマに興味をもつ人に書籍の存在も発信しやすくなった。今まで魚群探知機がない手漕ぎボートで大海原に釣りに行っていたようなものだ。なんて無謀な。

そして小取舎6年目にしてついに版元ドットコムさんに会員登録した。まだ入会したばかりなので効果のほどはわかっていないが、まずは全国の名の知れた六五〇社弱の先

輩出版社様に、小取舎ってという出版社があるんだと認識されることに喜びを感じている。県外の書店様にも書籍情報がこれまでより発信しやすい。さらに会員出版社から色々な情報が入ってきたり、イベントがあったりとメリットがすごい。

手が回らなかつたひとり出版の苦悩を和らげる優しいシステムが調べるとたくさんある。ひとり出版のことを聞かれる度に、「大手と区別するために便宜上ひとり出版社という言葉を使っていますが、ひとりで本を作っているわけではなく、著者とタッグを組んでいるし、印刷所の方、デザイナー、取次の方、書店員、読者などたくさんの方の力をお借りして成り立っている」ということを言っているわけだが、作ること以外は基本一人で作業している。経理だって自分だし、情報発信も自分だ。本の内容や書影などの情報について最低限はこちらで準備しなくてはいけないが、前々から課題だった大海原への情報発信が一人でしなくてもいいんだということが非常にありがたい。

最近、AIとどう共存して上手に生きて行くかという本がよく並んでいるし売れているみたいだ。本を編むことが楽しいので今後もあまりスタッフを雇うことを考えていな

い。それに変わって楽ができるところはAIやグーグルリサーチに頼りたいところもあるのでAI活用については肯定的だが、やはり実際に生きているその道の長けている人間様とのネットワークが結局大事なのだと思う。そもそも人と作るのが楽しいことであるし、物事の吸収具合とか理解しやすさはAIとは段違いだ。小取舎は鳥取県にちなんだ本ばかり扱うので県外の出版社とライバル関係にあるとはあまり思っていない。小取舎はまだ六年目の五歳なので、お兄ちゃんお姉ちゃんたちに色々教われるところは教わってインディペンデントな版元として大きく育ってきたい。

### 小取舎の最新刊

『人間疎外の時代』

高取正人 著

本体二〇〇〇円

発行 2025.11



# 論語について (10)

小原 修治

(県立高校教諭)

湯梨浜町松崎在住)

子曰、学而不思則罔、思而不学則殆。(為政篇第二・第十五章)

子〔し〕曰〔い〕はく、学びて思はざれば則〔すなは〕ち罔〔く〕ら〔し〕、思ひて学はざれば則〔すなは〕ち殆〔あや〕し。

本章は、「学」と「思」とを対比し、いずれか一方だけでは不十分だと述べたものだが、本来「学」と「思」とは、それぞれ何を意味したのだろうか。孔子は詩書礼楽を教え、弟子はそれを学んだとされる。従って、『論語』における「学」とは詩書礼楽を学ぶことである。が、それだけでは不十分だと説かれるのはなぜか。これについては、八佾篇第三章の「子〔し〕曰〔い〕はく、人にして仁ならずんば、礼を如何〔い〕かんせん。人にして仁ならずんば、樂を如何〔い〕かんせん」の章

句が参考になる。「礼楽」を「学ぶ」には「仁」であることが伴わなければならないと孔子は考えていたことが分かるからである。とすれば、「学」に伴わなければならないとされる本章の「思」の語もまた、「仁」に関連する意味を持つのだと考えられる。

とはいえ、「思」の語に本当にそのような意味があるのだろうか。そこで、『論語』における「思」の語の用例を調べると、季氏篇第十章に「孔子曰〔い〕はく、君子に九思有り。視には明を思ひ、聴には聰を思ひ、色には温を思ひ、貌には恭を思ひ、言には忠を思ひ、事には敬を思ひ、疑には問を思ひ、忿には難を思ひ、得〔う〕るを見ては義を思ふ」とある。

右の章の頻出する「思」の語について、橋本敬司は論文『思うこと』と『學ぶこと』——孔子の知のダイナミズムで、「單なる『思考・思索』ではなく、人間の理想的な生き方を自己自身に向かって求める、人間という存在主體の在り方を問う實存的身振りのことであつた」と述べている。ここに見える「思」の語は、「思う」といった一般的意味ではなく、倫理的な「身振り」のことだと言っているのである。これは『論語』における「思」の語が「仁」に関連する意味を持つことに言及したものであろう。右の章の孔子の発言が「君子に九思有り」の句で始まるのも示唆的である。「君子」とは「仁」の人だからである。そのことは、例えば里仁篇第五章に「君子は仁を去りて

悪(いづ)くにか名を成さん、君子は食を終ふるの間も仁に違(たが)ふこと無し」であるのを見れば首肯されよう。

なお、本章前半の句「学びて思はざれば則(す)なは」ち罔(くわ)の「罔(くわ)とは、『論語集解』が後漢の荀咸の注を引いて、「学びて其(そ)の義理を尋思せざれば、罔然として之(これ)を得(う)る所無きなり」と説いているように、ぼんやりした状態を表す語だと考えられる。思うに、「思」を伴わなければ、詩書礼楽を学んでも、その意義は明確につかめないと言うのである。

ここからは、本章後半の「思ひて学ばざれば則(す)なは」ち殆(あや)ふし」の句について考えたい。前半の句とは対称的に、この句は「思」に「学」が伴わなければ危険だ(「殆(あや)ふし」と言っている。なぜ危険なのか。これについては、陽貨篇第八章の「仁を好みて学を好まざれば其(そ)の蔽や愚。知を好みて学を好まざれば其(そ)の蔽や蕩。信を好みて学を好まざれば其(そ)の蔽や賊、直を好みて学を好まざれば其(そ)の蔽や絞、勇を好みて学を好まざれば其(そ)の蔽や乱、剛を好みて学を好まざれば其(そ)の蔽や狂」という孔子の言葉が参考になる。

孔子が愛弟子の子路に「学」の重要性を説いた章だが、「仁」「知」「信」「直」「勇」「剛」の語を取り上げ、「学」を欠いた際に生まれる「蔽(=弊害)」について、「愚」「蕩」「賊」「絞」

「乱」「狂」の語をそれぞれに対応させることで説明しているからである。思うに、「仁」「知」「信」「直」「勇」「剛」は、いずれも心の在り方を表わす語であり、いずれも「学」ぶことが伴わなければそれぞれに「蔽(=弊害)」が生じるという孔子の見解は、本章後半の句「思ひて学ばざれば則(す)なは」ち殆(あや)ふし」とほぼ同じことを説いたものだと見てよいだろう。

冒頭でも述べたように、『論語』における「学」とは、詩書礼楽を学ぶことである。一方、「思」とは、橋本敬司が説くように、君子の心の在り方に思いを致す、倫理的な身振りだと言えよう。図式化して言えば、「学」||「礼」を学ぶこと、「思」||「仁」に思いを致すこと、である。そう考えれば、「礼」と「仁」とが密接な関係にあることこそ、本章から読み取るべき重要な主題であるということにならないだろうか。「仁」について考える上で最重要だと思われる顔淵篇第一章の「克己復礼を仁と為(な)す」の句に「礼」の語が見えるのも、このことに関係があろう。

## 立春の卵（\*\*）

ムラカミヒロミ

（ライティングブックマン）

前回の話で、中谷宇吉郎が「立春の卵」の実験をする際には、細君に卵の調達を命じている。夫人は、何とか二個を手に入れて来るが、それも、目当ての店を二軒回り、子どもが病気でとか何とか理由を付けて、ようやく売ってもらえたという。昭和二十二年、当時の都会の食糧事情はかくの如きものであった。

ちなみに、荷風の『断腸亭日乗』には、この頃のモノの値段が克明に記録されており、昭和二十二年四月の鶏卵一個は九円である。

それが、十一月には十八円に値上がりし、翌年には二十四円になる。喫茶店のコーヒーが一杯二十円、二十二年暮れに出た岩波文庫の『澤東綺譚』が三十五円である。卵は超贅沢品であったと言っていいたいだろう。

翻って、令和八年のスーパーマーケットでは、卵一パック

（十個入り）が二百円台半ば。ほんの二、三年前までは百円で特売品の目玉だったことは記憶に新しい。

鳥インフルエンザやら、飼料代の高騰やらで、あれよあれよという間に上がってしまったとは言い条、それでも一個当たり二十数円。昭和二十三年からは、ほとんど値上がりしていないことになる。卵が物価の優等生、と言われる所以だが、養鶏農家としては笑えまい。

卵が滋養強壯の薬替わりであった二十年代から十有余年、シャンソン歌手の石井好子はパリに留学した。

その時の体験を（もっぱら食べ物の視点で）描いたエッセイが、「暮しの手帖」に連載され、後に単行本『巴里の空の下オムレツのにおいは流れる』『暮しの手帖社、一九六三』にまとまっている。

この本では、冒頭の、景気よくバター八分の一ポンドと卵四個を使った、下宿の女主人（マダム）がふるまうオムレツを皮切りに、これでもかと言わんばかりに卵料理が次から次へと紹介される。まるで卵飢饉からの解放を謳歌しているかのようでもある。

日本と欧州という彼我の差、なのではない。「戦争中はずいぶん困ったわ」とマダムは語っている。国土を散々に蹂躪された欧州諸国も、戦後の食糧事情は貧しいものだった。

ヘレーン・ハンフの『チャリング・クロス街八十四番地』は、アメリカの愛書家とロンドンの古書店との間で交わされた書簡集だが、著者が本を注文する傍ら、英国の食糧事情を聴き及び、復活祭やクリスマスに、ハムや乾燥卵の缶詰（こんなものがあつたのだ！）を送って、店員一同から感謝されるというエピソードがある。一九五〇年の話だ。

さて、石井のエッセイ集の中に、〈エフ・ア・ラ・リユス〉という料理が載っている。

件の亡命ロシア人マダム直伝の料理で、〈ロシア風たまご〉という名だが、マダムによれば、ロシアでは〈イタリア風たまご〉と呼んでいたそう。

「お皿に二、三枚レタスの葉をおく。その上に、一センチ幅に輪切りにしたゆで卵を形よくのせて、マヨネーズをかける。それだけ。」

ちなみに、『レシピ版』巴里の空の下オムレツのにおいは流

れる』扶桑社、二〇〇四）という嬉しい本があり、こちらには、エッセイで紹介された料理が、作り方と共に写真入りで載っている。ただし、この本では、輪切りでなく、縦半分に分けて切っているけれど。

昔懐かしき花森安治風（暮しの手帖）風）のレイアウト、色合いで、それだけで美味しそうである。

所で、誠に唐突ながら、ゆで卵の正しい食べ方を御存じだろうか。

当節、ホテルの朝食は、バイキング式が多いが、必ず卵料理が何品かある。和食なら卵焼き、洋食ならスクランブルエッグかゆで卵、といった按配である。

かつては、いちいちウエイターが、「卵は、スクランブルに なぎますか、目玉焼きに なぎますか」などと聞いていたものだが、今は昔。

（この項、更に次回に続く）

## 内坪井町日記 (21)

齊藤仁昭(ケバブジョンソン)

元長崎書店勤務)

二月某日

八代の業者の会合で、二十人くらいを前に話をせねばならなくなったので、自分の会社のことや季節の和菓子の紹介、菓子工業組合の活動の紹介をすることにした。人前で話すことやプレゼンテーションはとても苦手。ライブでも客席を見ることができないというのに。

何日か前から資料作りを始めたが、面白く仕上げる事ができなくて悲しくなった。営業マンのセンスを持ち合わせていない。悲しくなったけれども何とかパワーポイントの資料を完成させた。

会合は月曜日の19時からの予定。通常通り朝は7時半頃に出動したのだが何だか頭痛と寒気がする。「すぐに体調を崩す内坪井の中年日記」にタイトルを変えるべきかもしれ

ない。

夕方までの仕事はなんとか持ちこたえたが、定時の17時にほかの皆が仕事を上がったあとくらいから頭痛と寒気がひどくなる。節々も痛い。検温すると38度6分。完全にアウト。これはいかん会合も休もうかと思ったが、せっかく自分の順番が回ってきたトークを飛ばすわけにもいかないので会場に向かう前に薬局に寄り、解熱剤を飲んでおいた。(今振り返ればインフルエンザやコロナの可能性もあっただろうから、欠席すべきだった。)

解熱剤で少し持ち直し、いよいよ本番。見ている方々が迫力のある方が多いので(先輩がほとんど)緊張と体調不良が重なり呼吸が荒くなる。

会社のこと、季節の菓子のこと、組合のことを順番に話す。何分くらい話したのか時間の感覚が鈍い。花びらもちのことや桜餅のことなど、質問をなげかけつつそれなりに楽しく話せたような気がする。終了後にくっつか質疑応答もあり、何とかやり通せた。

さて帰り道が40キロくらいあるわけだが、3度くらい休憩を挟まないと家までたどりつけなかった。ついこの前にも寒気に見舞われながら帰宅したような気がするがいつだったか。帰宅後の検温で39度くらい。ネットで病院を予約し、早々に寝る。

二月某日

火曜日。朝一番に病院を予約していたが、熱が37度台まで下がっており、ちょっと体も楽だったのでキャンセルして、仕事は欠勤して家で休む。インフルじゃなかったかなと思つて気楽に過ごしていたがしかし夜にまた高熱と頭痛。動けない。

翌水曜日が祝日だったため病院には行けず。熱も引かないが寝るしかない。木曜日の朝に病院を予約する。

木曜日に病院へ。発熱外来のため、駐車場を受診。鼻をぐりぐりして検査してもらったが、コロナでもインフルでもないとのこと。コロナでもインフルでもない何かのウイルスに感染したであろうこのような症状の患者が非常に増えていると先生が言っていた。対症療法しかないなので、免疫力を上げるといふ漢方を処方してもらつた。熱は全然下がらないし頭も回らない。

金曜日でも出社できず。土曜の販売用のラベルなどを作らねばならなかったが身動きがとれず断念。症状が胃にもきていて食事ができず。都合4キロくらい痩せてしまった。ズボンがすつきり。

それでもまだまだ熱が下がらず土曜に病院を再予約。胃

のむかむかがひどい。先生が「きついでしよう……」ととても親身に話してくれて、優しい先生だなあと思っていたら、「実は私も今朝から同じ症状でして……。」とおっしゃる。地域医療を支える医師の方を尊敬する。

この土日は月末のワンマンライブに向けて最後の練習の予定だったが。症状をこじらせてはいけないので状況を断念した。メンバーも、ゆっくり休んでおくようにと言ってくれてありがたし。

日曜、ようやく熱が下がる。

二月某日

とにかく食事ができなかつたし、寝てばかりだったので体力が落ちていた。ライブにむけ調整をせねばならないが、あせらずちよつとずつ食事を増やし、歩いたりして筋力を戻していく。

## ロンドン、世界の中心？

三浦 永理

(三十一歳・女性)

そうか、ロンドンに馴染めないのは、都会だからだと、最近こちの友人と話していて気づいた。

五年間に及ぶ鳥取の生活で馴染んだのは、人口の少ない田舎暮らし。若い社会人というだけで重宝されるし、私のように都会から田舎にやってくる女性となると、ますます少ない人数だ。存在するだけでありがたいと思われていた時間だった。

翻つて、ロンドンには世界中から人が集まる。英語を学ぶに語学学校にいる人。大学にいる人。大学院にいる人。自国の企業から派遣されて駐在員として働いている人。ワーキングホリデイできている人。現地の企業で働いている人。さまざままだ、「英語」が話されている国だからこそ、たとえ「C」を出たとしても、(その頃と比べれば数に変動はあるが)世界中から人を惹きつけている。

思えば、鳥取に在る間に、私の視野はどうしても狭まっていたように思う。鳥取でなければ、東京に出れば多くのチャ

ンスがあると。ロンドンはそのいう意味で言うところ、いまだに世界の中心のような顔をしている街である。それはある意味「英語」によって。

今学期とつづる授業「[English in Diverse World Context]」(多様な世界の文脈における英語)と言う授業があり、応用言語学の名物教授であるジョン・オレガン教授によるものだ。彼が言っているのは、経済と英語の使用は密接に結びついているという日本人の視点からすると当たり前のことながら、それをマルクスの『資本論』に結びつけて、英語が実際には何の富を生み出さないにも関わらず、資本に「ただ乗り」することによって覇権を握っていることを批判する。英語の繁栄は、十七世紀以降の大堤帝国と世界大戦以後のアメリカの覇権によるものだ。そして、英語の支配によって、かろうじてアメリカもイギリスも力を握る側でい続けている。軍事的・経済的優位性に落ち込みはあるものの、アカデミアでは英語の覇権はしばらく崩れそうにないらしい。

実際にアカデミックジャーナルの上位には英語によるものが並んでいる。そして、その研究誌たちの多くが結局「ネイティブ」による英語チェックを求めている。オレガン教授は、英語の自由な使用、English as Lingua Francaのような多様な英語を奨励する研究に対して、いまだにネイティブ

の英語がこれだけ蔓延っている構造に対する批判が足りない」と批判する。

そんな英語の影響で、ロンドンには結局多くの人が世界中から集まってくる。真正な(authentic)英語を求めて。

実際に、ロンドンの街中を歩くと superdiverse な様相だ。「いわゆる」白人のイギリス人だけでなく、黒人、南アジア人、東アジア人、中東系、ヨーロッパの他の地域の人々、世界中から集まっている。UCL は、大学に通う多くの学生が中国人であり、学校経営も、現地学生の二倍もする国際学生の学費に依存している。何もかも高くつくロンドンでは、どこからか搾取しないとイケない。ロンドンで暮らしていても、「どこの人？」と聞かれることもないし、関心も持たれていない。お金さえ払ってしまえば、この街に存在できるが、お節介されることも懐かしく思う。

そう言う意味では、東京も同じだろう。ここまで街中に多様性が広がっているかは、置いておいて。

中国人がほとんどのコースで、とうとう私以外全員中国人というグループ構成になった時、ディスカッションは七割ほど中国語になった。残念ながら、私の中国語は初級者レベルなので、「ご飯食べた後に練習しよう」くらいしか聞き取

れず、アカデミックなディスカッションが始まってしまうと入り込めない。手探りで英語のツツコミを入れる。その中で、居心地の悪さと、その居心地の悪さに少し面白くなっている自分がいる。

彼らの多くがこのコースが終われば、この街を去る。そうになると、結局ロンドンでできた知り合いの多くは、上海、北京、広州など中国の各地に散らばることになる。私にはこのロンドンに知り合いはいない。

この街はいつか私のことを忘れる。今も私が呼吸していることに気づいていない。それはどこか寂しくて、それでいいのだと思うこともある。

日の長くなったロンドンで、学校からの帰り道、夕陽が沈むのを眺める。こうやって空を見上げることも、きつとそんな多くないのだろうか、何の記念日でもないのに、私は空の写真を撮る。

一月に入ってから二月の後半まで毎日のようにイギリスでは雨が降っていた。二月の終わり、ロンドンは春の予感を感じさせる日差しを取り戻している。

そして、三月末で大学院の講義は終わりを迎える。

## ごほうび

あきの素生

(くうねるめがね)

やっと雪の季節が過ぎようとしている。今年はよく雪をかいた。コンスタントに積もるので、途中から筋肉痛にもならなくなるほどだったが、確実に体力が奪われて、身体に怠さがいつまでも残った。雪かきは草むしりに似ていると思う。目の前の草を、雪を、無心に取り払う。一定時間取り組めば、必ず目に見える形で成果が得られる。それを知っているから、うんざりしつつも妙に張り切ってしまう。後先考えずにスコップをふるった代償がこの怠さかと、寒さから一秒でも長く逃れようともぐり込む布団の中、後悔とも反省ともつかず寝ぼけた頭で考える。

借りている駐車場の雪かきに行った。駐車場の雪かきには、いつも難儀する。自分の自由にできるのは車一台分のスペースだけ。その中でやりくりしないといけないので、自然、車の後方に雪を積み上げていくことになる。今年み

たいに三十センチも四十センチも積もると、相当の高さに積み上げないとならないが、スコップ一本では限界がある。途方に暮れつつ、でも他にどうすることもできないので、とりあえず雪をぎくぎくやっていると、駐車場のオーナーさんが声をかけてくださった。労いの言葉とともに差し出されたのは、紅白のつぼみが付いた樁だった。目の前の真っ白な景色が、ぱっと明るく、暖かくなったようだった。自分の借りているスペースの雪を自分の都合でかいているだけなのに、と恐縮したが、そう思うことも無粋な気がして、うれしさに身を任せてお礼を伝え、二枝の樁をいただいた。その後の雪かきが捗ったのはいうまでもない。

家に帰り、いただいた樁を気に入りのコップに活けた。これは今日の雪かきのごほうびだと思った。

ごほうびをもらった記憶があまりない。と感じてきた。それは、ごほうびの持つイメージに由来している。何かを達成したらもらえるもの。大辞泉にも「ほめて与える金品褒賞。」とある。そういった習慣が、身近にはなかった。

自らごほうびを設定したことはある。受験が終わったら、あのホラー映画を夜中の二時頃に一人で毛布をかぶって見るんだ、というのが、一番よく覚えているセルフプロデュース

スのごほうびだ。当時流行していたホラー小説の映画で、小説は読んでいたのだが、映画は我慢して見ずにいたのだ。小説を読む方が時間がかかっただろうに、と今にして思う。さしてホラー好きというわけでもないし、シンプルに怖いので、果たして自分にとってごほうびとして成立していたのかは、もう覚えていない。

このごほうびのミソは、受験の成否を問うていないことだ。結果はどうあれ、その時期を耐えたごほうび。時間が経てば、必ずもらえる。この類のごほうびは、今でも自分によくあげている。〇〇が終わったたら。ずっと見ていたドラマが最終回だから、今日はコンビニで何を買って（食べなくても）もよい、なんてのもある。ドラマの最終回に何の貢献もしていないのに滑稽だが、改めて考えるに、ふだんコンビニでの買い物で買いたいものを我慢している自分へのごほうび、ということになるだろうか。

食えることが好きなので、食べものがごほうびになることがままある。お肉やスイーツ、そしてお酒。思うがままに摂取したいけど、身体への影響を考えて日頃は控えている。だからこのごほうびだが、こうしてみると、自分の場合、日常的に「待て」の状態で過ごしていて、それから束の間解き放たれることをごほうびとしていることが多い

のだとわかった。うーん、マイナスをゼロにするのではなく、プラスになることを考えられるようになってみたい。

いただいた椿はつぼみをゆるゆるとひらいて、こぼれそうな花芯の黄色をあざやかに見せた。花が終わった後も、照り照りとした深い緑の葉はかたく、冬の部屋を彩ってくれた。思いがけず人からもたらされたごほうびは、よろこびに満ちている。その人は、私にごほうびを与えようとしたわけではない。労いだったり、お礼だったり、お祝いだったりする。ものではなく、言葉や気持ちの場合もある。それをいただいたうれしさが、私にとってのごほうびとなる。

# 1)案内



ドラメラリア (座敷わらし)



定有堂教室「読む会」 (講師 岩田直樹氏)

定有堂教室「ドウルーズを読む会」

定有堂教室「読書室ピオトープ」

それぞれ会場は とりぎん(県民) 文化会館

葉香太極拳クラブ

会場 麒麟スクエア (市役所二階 水曜夜・土曜昼)

・定有堂教室と太極拳の詳細は  
下記の、QRコード参照

(@ドラメラリア)



『音信不通』紙版の置き場

・県立図書館2階パンフコーナー

・エスキース(倉吉)・森の生活者・邯鄲堂・

・SHEEPSHEEP BOOKS(定有堂ビル2階)

・定有堂ビル2階「音信不通」編集部



・編集後記:

前回いい加減クッキングの権化のように書いてしまった父ですが、実際はかなり料理達人な人で、なんならわたしより料理マメ。特にいわゆる「粉もん」については生粋の大阪人の血が騒ぐのか、ヘラを手放そうとしない粉もん番長です。ただし何でもピリ辛にしたがる癖があり、赤い粉(七味)か黒い粉(胡椒)がふんだんにかかった料理に、刺激物の苦手な義兄は時々悶絶しています。

ドラメラリア(編集長)

最近世の中の動きに取り残されているのではないかと、そう思いながらも、『ノモンハンの夏』文春文庫(半藤一利)を読んでいる。古い話だが、けっこう新しく感じる。歴史つて反復するんだな、という思いです。お友だちの田村さんにそう言ったら、やはり新しいのも読まなければ、といわれ、お勧めの『新書 世界現代史』講談社新書(川北省悟)も読みはじめています。一方、『菌類が世界を救う』河出書房新社(マリーリン・シエルドレイク)そして『植物の生の哲学』勁草書房(エマヌエーレ・コッチャ)も読んでいます。ドウルーズのリゾームを「菌系体」で考えています。異類と異類を水平につなぐ世界です。同時並行に読んで本が多いので、結局食卓に積み上げる。ここなら見失わないので。

奈良敏行(発行人)